
雪月花

神田 ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪月花

【Zコード】

Z5336C

【作者名】

神田 ジュン

【あらすじ】

ある二人の恋人たちの、ラブストーリー。お互い、すれ違いながらも、本当に人を愛することは?という答えを導き出す。男と女、それぞれの視点から物語を描いています。

プロローグ（前書き）

この物語は【彼】と【彼女】で書いています。あえて名前は付けませんでした。そして、それぞれの視点から物語は構成されています。彼の視点・彼女の視点。一見、同じ場面でも、男と女では考え方、捕え方が違います。物語の構成上、3部構成になっています。第一部は序章にすぎないので、第2部まで、我慢して読んでほしいです。

プロローグ

この海はあのころとなんら変わらず、僕を迎えてくれていた。

人工の砂浜、造られた景色。

すぐそこには国道が走っていて、

海風が強いこの海にはまばらにしか人気は無く、

どこからか流れ着いたどう、ジュースのペットボトルや空き缶、お菓子の袋、誰かが捨てたのであるひつ、朽ち果てた自転車が横たわっている。

そして夏の思い出の残骸の花火などが所々にあり、お世辞にも綺麗な海とは呼べなかつた。

僕はまた、この場所に立つてゐる。

約束の場所。

思い出の場所。

別れの場所。

あれからなんとなく僕はこの場所をさけるよつになつた。

ビーチの入り口にあるひとつのかまくらが僕の車をやさしい光で包み込んでいた。

空をみあげると、漆黒の空に体が吸い込まれそつた感じがした。

淡く輝く下弦の月が周りの星たちと、滑らかに語り合つているよつな、そんな気がした。

君はここから見る景色が好きだつたね。

沖のほうは赤い光がチカチカと規則的に点滅を繰り返していた。

手前には恋人達が幸せそうに語り合つ赤い橋や、あのじゅうは確かもつと白かつた、古びたテトラポットがある。

ビーチは『』で汚れているけれど、それがかえつてこの世界をリア

ルに見せていた。

周りを見渡せば今日はクリスマスイブだということもあり、カップルが何組か座っている。

何をしているのかは暗くて良くは見えない。

あの日もクリスマスイブだったね。

それもホワイトクリスマスになつたんだ、彼女のいうとおり。

あのころの君が、今の僕をみたらなんて想つのだろう。

教えておくれ、この僕に。

君なら、なんていつてくれるんだい？

プロローグ（後書き）

もっと、表現力があれば・・と、自分の力の無さを感じました。
ストーリー的には好きなんでw
ホントは、バットエンディングでしたが、ハッピーエンドにしましたw

第1部 1章 笑顔の横で

「 もへ、おわりにしようか

彼女は僕の腕の中で優しい声でそういった。

彼女に言わせてしまった言葉。

深く、そして重い言葉。

「 ・・ そうか、わかった。」

そつ言うのが精一杯だった。

「 ・・ あ、雪・・」

「 ・・ ほんとだ・・」

彼女の予言どおり、この日はホワイトクリスマスになった。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白をと、ビームでも続いている海が
僕達を包んでいるような気がした。

彼女の冷たくなった体と、彼女に対するありがとうとうとう気持ちを
抱きながら、いつまでもこの時間が続くことを祈り、彼女の温もり
を感じていた。その温もりは僕に彼女と過ごした日々はとても大切
な時間だったと気付かせてくれていた。

この腕を放せばもう感じられない温もり。 そう思つと僕は涙が止ま
らなかつた・・・。

彼女と過ごしたやさしい時間が思つ出となつて涙と一緒に溢れ出て
きた・・・。

（数ヶ月前）

「 わつ」

彼女と約束していたデートの待ち合わせ場所で、タバコをふかしな

がら待っていた僕に

突然うしろから彼女が飛びついて僕を脅かした。

「ごめん。おまたせ〜〜」

「びっくりすんだろ？つたく、それよりも、おい遅刻だぞ？」
その顔はわるびれた様子もなく、いたずらっぽい笑顔をふりまいていた。

「ごめんねえ、ほんと、『ごめん。怒ってるの？でも、ほら、女の子つてお化粧とか時間がかかるからさあ』

「うん、そつかそうだな・・つて、だからつて遅刻してもいいってわけじゃないだろ？だいたい遅刻したらなんてゆーんだっけ？」

「はい、ごめんなさい・・もう、そんなにおこらないでよ〜。ね？すきだよ〜すきつ」

そういうつて彼女は僕の腕をとり、背伸びをし15cmある身長差を縮め頬にキスをしてきた。

「おい、もう、わかつたから、やめろって公衆の面前で、はずかしいだろ。そんなんじゃ、ごまかされないぞ。」

そうは言いながらも、僕は少しうれしかった。

「ここだけだとバカツフルばいけれど、僕はあんまり馴れ合いは好きではないし、ベタベタするのも苦手だ。付き合つて1年ちょっとのどこにでもいる普通のカツフルだ。」

よく彼女の買ひ物につきあつては、買ひ物が長いと、愚痴をたれていたし、たまにゲームセンターにいくと、彼女のために2千円も使い、さほどかわいくもない、ぬいぐるみをとつてあげたりもした。テレビで話題の映画を観に街の映画館にいつては決まって、ポップコーンとコーラを一つずつ買ひ、仲良く2人で分けながら映画に夢中になつた。

観終わると近くのカフェでお互いの感想を言い合い、たまにお互いの解釈の違いから口論になつたりもしたが、最後はビデオがでたらまた見ようね、ということでまとまつていた。

そして、僕の家に彼女をいつもの様に連れてきては体を重ね愛を確かめ合つたりした。別れ際には背を向いている僕に決まって彼女は細い腕をまわし、体をよせてきた。

僕は背中に感じる彼女の鼓動にやすらぎを感じ、愛しくなり向き直つて彼女の唇にやさしくキスをした。

キスをするたびにうまくなつていく彼女に、僕はなぜだか切なくなつた。

電話は毎日してたし、メールも用も無いのに毎日10通はやり取りをしていた。

そのメールで僕は人と繋がっているという実感を得ていた

2章 包み込むよひ

「たのしみだね。」

ショッピングモールで買い物を満喫した彼女は、帰りに海で流れ星を見てから帰るひと、僕の手を引つ張りながらそう言つた。

「なにがさ?」

「もう! わかんないの? もうすぐクリスマスイブじゃん! あさつてだよ? 初めて一緒に過ごすイブだよ? 去年は私のせいで会えなかつたし、今年こそはね。たのしみ~」

「ああ、そうだなあ。」

「どうするどうする? なにしようか? なにしよう~

「ん~, なんでもいいんじやん?」

「もう~。また適当な返事してえ。でも、たのしみだなあ、はやく

クリスマスにならないかなあ

「そりだな~。たのしみだ。」

僕は買い物に疲れて、適当に返事をした。

どうして女の買い物はいつも長いのだろう。おかげでクタクタだ。

「ちよつと~、ほんとにそう思つてるの?」

彼女はちよつと不機嫌そうな顔をして、僕の一の腕をつねつた。僕はちよつと彼女が怒った顔が好きで、時折わざと彼女が怒るような事を言つたりした。

「いてて、いてえつて! マジで楽しみにしてるって。」

「プレゼントも用意してあるし。」

「・・・ほんと? ・・・うれしい・・。」

本当にうれしそうな顔をしていた。

女心はわからないものだ。さっきまで怒っていたのに、またすぐ、機嫌がよくなつたり、よくわからない生き物だ。

「ねえ! イブの日は、またここに来ひよーーーの海を見にねーねえ、いいでしょ?」

決してお世辞にも豊満な胸とはいえないその胸を、僕の腕に押し付けながら甘えた声で彼女はそう言つた。

「別にいいけど、海が見たいなら他のきれいな所、連れてつてやるよ」

「やだ！この海がいいの。この海が好きなの。うまくいえないけど、この海は・・・やっぱり、秘密！」

「なんだよ？気になるだろ？教えろよ」

「ダメー、内緒ですぅ」

彼女はいたずらっぽく照れた表情をして笑つた。

「なんだよー、ちえ、まあいいや」

いつものように僕は流した返事をした。

僕の左手には彼女が一目惚れして買った黒のコートとマフラーが入った買い物袋。右の腕は彼女の握り締める手で塞がつっていた。

僕は背中が痒いのをがまんして、腕を組んで人がまばらな人工の砂浜をゆっくり歩いた。

3章 恋の始まり

彼女と初めて出会ったのは、1年半ぐらいまえだった。

うつとうしい梅雨が明け、7年もの歳月を土の中で過ごした鬱憤を晴らすかのように、蝉が五月蠅く鳴いていた夏の始まりの頃だった。アルバイトは別になにがやりたいとかではなく、求人広告にたまたま目がとまつたやつだった。普通の人と同じことがしてみたかっただけだった。

初めてやるバイトで右も左もわからなかつた僕に、親切に教えてくれたのが彼女だった。1つ年下の彼女は細身で、背中まである長い亞麻色の髪がとても似合つていて、笑うとエクボができるのが印象的だった。

お互い恋人もいなかつたし、なにかと肌が合つていたので、恋人関係になるのには夏休み期間中だけで十分だった。

僕は出会いを求めてアルバイトを始めたわけではないし、彼女のことも初めはまったく意識していなかつた。

それが、ある出来事がきっかけで気になる存在になつていった。

僕は今まで「彼女」がいなかつたわけではない。

今まで何人かの女性と付き合つてきた。だが、みんな上辺だけの付き合いだった。別にいなればいいで困ることはなかつたし、適当に付き合っていたから、いなくなつても何も感じなかつた。でも、今までの「彼女」とは違う何かを彼女はもつていた。彼女となら・・・そんな気がした。そんな気にさせられた。

だからそんな彼女に自分を見透かされているような言葉をいわれてショックだったのかかもしれない。

4章 真実は彼女の流した涙の中。

「まだかなあ、流れ星」

彼女はそつこいながら僕の手をさらに強く握った。

僕はこんな都会の真中にある海で流れ星なんか見つけられるわけがないと思いながら、彼女に無言でつきあつた。

今年の冬は暖冬なのか、昼間は夏の様な陽気だつたが夜の海風が着実に冬が近づいていたことを知らせていた。

僕は彼女の体温を感じながらちゅうと薄着で来てしまったことを少し後悔した。

首が疲れるねと、笑いながら言つた彼女はおもむろに、去年の夏、一緒に買いに行つたブランド物のバックから魔法瓶を取り出し、あたたかいココアをコップに注いだ。

暖かい飲みものを用意してあるなんて、気が利くつてゆーのか、なんてゆーのか・・なにをかんがえているのか。

僕は聞こつかと思ったが、ココアから立ち上る湯気をみてこりに、そんな疑問などどうでもよくなつた。

いきなり暖かいものを体内にといれて体がビッククリしていた僕に、彼女は昼間買つたばかりの黒のマフラーを袋からとりだし、やさしく僕の首に巻きつけた。

「ありがとう」

僕は聞こえなごぐりご小さな声で言った。

すると彼女はいつもの微笑で、かわついた僕の唇にキスをした。

そのやわしきキスはココアの味がした。

その時間がたまらなく切なく、そしてはかなく感じた。

「あー流れ星！」

彼女の横顔に見とれていた僕はその言葉に反応してすぐ空を見上げたが、もう流れ星はみえなかつた。

「みたみた？」

彼女は僕が見逃したのを承知の上で、いたずらっぽく聞いてきた。

「私はしっかりみたもんねえ。願い事もバツチリ！」

「なにをお願いしたんだ？」

「へへへ、ひ・み・つ！人に言つちやつたいう利益なくなつちやつもん。」

彼女は甘えた声で、目を輝かせて言った。

「ふうん、じゃあ、きかね～よ

僕はわざとひょっと不機嫌そうな声で彼女の反応を見ることにした。

彼女は僕の期待通りにすぐさま、あやまつてきて、僕の腕を強く抱きしめた。

そして少し淋しい目で海を見ていたかと思つて、その日は焦点があつてないようだつた。

「なあ、どうした？おいつてば。」

僕は気になつて彼女に声をかけた。

「おー、どうした？ほーとしちゃつて

「ん・・なんでもない。海みてただけだよ。」

「ふーん。ならいいけどさ。」

「あーあさつてさあ、雪、降らないかなあ。イブの日。イブの日に雪つてロマンチックだよね~、なんか絶対、雪降るよ~な気がする~」

彼女は突然、思いついたかのように、またクリスマスの話をしだした。

「降らないって。天氣予報では晴れだつていつてたぞ。それに東京ではホワイトクリスマスなんてまずありえないよ。あんなのドラマの中だけさ。たしか二〇〇〇年間で一回しかなかつたはずだよ。降つたら奇跡だつて。」

「せうだとしても、降るよ、絶対ね。」

そういうつた彼女の笑顔が印象的だつた。

「ねえ、今年のクリスマスだけでなく、この先も、来年も再来年もず～つと、ず～つとクリスマスは一緒にここに来よつね！約束ね！」

「え～、やだよ、めんどくせーなあ。だいたい先のことなんかわからんねーだろ？そんな先の約束したつて意味無いよ。」

わざと突き放すように言った僕はココアを一気に飲み干し、飲み干したコップを彼女に渡そうと、ふと彼女の顔をみると、彼女は大粒の涙を流していた。

その顔に精気はなく目は焦点が合つていなかつた。

まるで幽霊でも見たかのように青ざめたその顔は今まで僕に見せたこともない顔だつた。

僕は突然の出来事に戸惑つてしまつた。

なぜ泣いているのか？

わづきの返事のせいいか？

どうした？と声をかけても彼女は意識がないのかただただうわごとのように、なんでなんで？と繰り返し言い、泣いているだけだつた。

そこまで泣くようなことだつたか？僕はただただ謝ることしかでき

なかつた。

そんな僕にいきなり彼女は抱きついてきた。

今までにないぐらい力強く。

その小さな手をいっぱいに広げながら、僕の胸の中で子供みたいに泣いていた。

「セツキは？」めんね

僕らはいつも映画みたあとにきているカフェにきていた。

「コーヒーとレモンティーをオーダーした僕らは、しばらく沈黙したと、やっと落ち着いたのか彼女から話しがけてきた。

「あ、ああ、・・なんだつたんだよ、、なんで突然なきだしたんだ？なんか気に障つた？」

「『めんね、さつきはちょっと感情が高ぶつちやつて、、ほとどこめん、気にしないで。ね？』

「気になるよ。ちゃんとわけを言つてよ。」

「ちょっとね。なんでもないの。もう大丈夫だから。」

「なんだよ・・

僕は力なく答えた。

「愛してる。」

「え？ な、なんだよ、突然。」

「うん、別に。だた、言いたくて。愛してるよ。」

「わ、わかったよ。まったく。突然泣き出したりわけわかんねえなあ」

僕は、彼女の言葉に内心どじかほつとした。

涙のわけがわからなくなつたし、僕のせいかと思い、嫌われたんじゃないかと思つたが、どうやら違つようだ。

「・・・ねえ、将来のこと、・・・どうかんがえてるの？」

「え？」

「・・・あなたは、いつもどじか悲しい目をしているの。・・・なんで・・人を理解しようとしてないの？今はいいかもしれないけど、この先そんな感じや・・・ダメだよ・・・いろんな世界をしらなきや。そして、しつかり目標も作つて、その目標のためにしつかりと自分の足であるといいかなきや。・・ね？」

「・・・なんだよ、いきなり。」

やさしい声でそう彼女が言つたのは僕が彼女との話し合いに一区切りがついたコーヒーをおかわりしたことだった。

僕は突然の彼女の言葉に戸惑い、「まかす様に、窓の外の街灯がいちょう並木のさびしそうな姿を浮き彫りにしてるのを見ながら、クシャクシャになつたソフトケースから煙草を取り出し、彼女からもら

つたジッポで火をつけた。

まるで彼女に心の中をのぞかれているような気持ちになり、そう答えるのが精一杯だった。

今まで必死で隠してきた本当の自分。

本当の僕は弱虫だ。

自分が傷つきたくないから他人と干渉したくない。

自分を守る為に嘘もつく。

相手にどう思われているか不安で、恐怖にかられる。

人の目が気になる。

僕の事どう思つてる?

僕を嫌つてる?

僕を見捨てる?

・・・。

知らず知らず僕はひねくれた人間になってしまっていた。

楽なほうにばかり流れていっていた。

人生なんて生まれたときから決まっていて、だれもその運命には逆らえないんだ。

だったら、その田の前にひいてあるレールを疑うことなく進んだほうが利口だと思つようになつた。

どうせいつかは必ず死ぬんだし。そして死ぬときは必ず一人だ。

そう考へ、他人との干渉を極力避けてきた。

その例外が彼女だった。

彼女の存在に自分でもわからないがどこか惹かれていた。

そして彼女といれるなら、このつまらない人生も悪くないかなつと、思うようになつていた。

その彼女に僕の人生を否定された感じがして僕はショックだったのかもしれない。

「・・・どうじつじだよ。」

言葉が頭を通りず、一気に喉から感情とともにでてしまった。

そつからはもうとまらなかつた。

いろいろな考へが浮かんでは消え、いつも僕ではなかつた。

「なにがいいたんだよ。なに?なんなんだ?お前は哀れんでるの?」

「ち、ちがうよ、私はただ・・そうじやなくて、あなたはいつも、人と距離を置いてきたでしょ?言いたいことも言わないで・・だからせめて私には言つてほしいの、なにを考えて、何を思つているのか、素直に言つてほしいの。」

「お前に言われたくなーよ。だいたいおまえになにがわかるんだ?」

僕は、自分の中のわだかまりを彼女にぶつけてしまった。

彼女はなにも悪くないのに。

自分の感情をがむしゃらに吐き出し、言つだけ言つて彼女の前から消えた。

そしてクリスマスイヴを迎えた。

世間では、突然の異常気象により東京が40年ぶりのホワイトクリスマスになるかもと騒いでいた。

6章 聖なる夜（前書き）

6章 聖なる夜

「・・・もしもし、連絡ください。会って話がしたいから・・・待ついるから、ずっと・・・」

電話が嫌いな彼女からのメッセージを聞き終え、僕はしばらくじっと携帯電話を見つめていた。

ビービービーとな風になってしまったのだらつ。

別に理由なんてなかった。

彼女のこと嫌いになつたわけでもない。

ただ、なんとなく、このままいいのだらうかと、思つてしまつたからだらう。

彼女との関係の話ではなく、僕自身の生き方に・・。

僕は何もかもが面倒になつてしまつていた。

昔のよひ。

理想と現実。

夢と現実。

嫌になる。

逃げたくなる。

窓からのぞく灰色の空を眺めながら僕は深くため息をついた。

朝起きたときはいい天気だったが、夕方には今にも泣き出しそうな空をしていた。

その重い空が圧し掛かって来るよつて僕はたまらずベッドに倒れこんだ。

きっと彼女の予想は当たるだろ？。

天気予報もそういうていた。

今はまったく使っていない机の上に、無造作に置いてある「真立ての無邪気な彼女の笑顔を横目で見ながら、僕はゆっくりと瞼を閉じた。

『問題は自分か・・・』

彼女と会つて、ちゃんと話をしなければ・・・そう思い、僕は彼女の携帯電話を鳴らした。

街はどこもかしこも赤と緑のクリスマスカラーに彩られ、イルミネーションが輝いていた。

クリスマスソングがあちらこちらで流れ、不景気な世の中と言われているのが嘘の様に街は買い物客で活氣づいていた。

目にとまる人たちはカップルばかりで、壁どころかに向かつて歩いている姿が幸せそうに見えた。

そんな中、一人黒いマフラーと黒いコートをまとった女性が携帯電話を見つめていた。

その姿がどこか切なく、悲しそうに見え、そして愛しく見えた。

「約束の時間より早くついたやつ

彼女は人ごみの中に僕を見つけると、携帯電話をバックにしまい早足でやってきて、さっきまでの悲しそうな顔が嘘のように無邪気に笑つて言つた。

クリスマスだというのにその海は人が少なく、どこかさびしそうだった。

僕らはあの時、一緒に流れ星を探した場所と同じところに静かに腰をおろした。

どれほど時が経つたのだろうか、静けさがあたりを包みこんでいた。

そんなんか彼女が口を開いた。

「・・・んと・あ・、元気だつた?」

長い沈黙を破り、彼女は僕の目を見ずに震えた声で言った。

「うん、まあまあかな・・」

相変わらず僕は適当な返事をした。

正確にいえば彼女に僕の言葉をどう伝えたらいかそのことを考え頭がいっぱい、上の空だった。

「そうだ! またココア持ってきたんだ、一緒に飲もうよ・・」

彼女はそういうてバツクから魔法瓶をとりだし、僕にココアを注いでくれた。

僕にコップを差し出したその手が震えていた。

そんな彼女を横目でみると、静かに泣いていた。

それに気づいた彼女は照れ隠しの様に笑って、

「なに泣いてるんだろね、私・・・」とかすれた声でいった。

その涙は、初めて彼女が僕にみせた涙を思いださせてくれた。

そう恋のきっかけは彼女がみせた涙だった

7章 涙

その日はとてもよく晴れた暑い日で、空が透き通っていた。

バイトがなければ海にでも出かけたい気分だった。

煙草の煙がバイト先の休憩室を白くしていた。

そんな休憩室にはいると、彼女は泣いていた。

僕は驚いた。しかし、僕はその涙をうつぐしいと思ってしまった。

「ねえ、何で泣いているの？」

いつも人前では元気で無邪気な笑顔を振り撒いている彼女の涙を目のあたりにして、僕は唐突に質問してしまった。

僕はバイトにも慣れ、周りにも少しだが氣を使わずにいれるようになつたが、まだ彼女とは仕事の話しかしたことがなく、プライベートの話はお互い一切、話はしなかつた。

話す必要はないと思っていたし、彼女のプライベートは知らなくても良いと思っていたからだ。

そんな、仕事だけの関係だった。

そんな関係だった彼女に突然、質問をしてしまった。

「・・・今日も暑いね、仕事はだり~し、こんな日は海にでもいっ

て泳ぎたいよね

僕は彼女に聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、強引に話を変えた。

「そうだね、海、いきたいよね、海・・・みたいなあ・・・

彼女は遠くを見るようにして、僕にそう返事をした。

もう、彼女は涙をながしていなかつたが、休憩室の小さな窓から入ってくる夏の日差しで、彼女が流した涙のあとがキラキラと輝いていた。

僕はそんな彼女の顔に見とれてしまっていた。

「今日、11のあと時間ある?」

「え?」

彼女は僕の突然の言葉に驚いたようだ。

僕自身もなんでこんなことを言つてしまつたのか驚いていた。

僕は彼女がなんで泣いていたかわからなかつたが、放つてはいけない氣がして、気づいたら彼女を誘つていた。断られると思った。

とこりか、誘つたのを後悔し、断つてくれと願つた。

だが以外にも彼女は少し考えてからゆつくりと首を縦にうなづき、涙の跡を拭いた。

そのときには彼女はいつも僕が知っている笑顔が良くなじみ、元気な彼女に戻っていた。

8章 別れ、そして・・

僕は忘れてしまっていた。

あの時彼女の涙をみて、海を見に行こうと誘い、はじめて一人で出かけた海が、今いるこの海だったということを。

今、はっきりと思い出した。

彼女のしづかにながれる涙をもう一度、目のあたりにして。そして、それと同時に彼女の涙は彼女への僕の気持ちを、はっきりときづかってくれた。

僕は彼女が好きだ。

この世界で誰よりも大切で、そして愛しい存在。

僕の弱い部分を彼女は何も言わず、やさしく支え続けてくれている。

誰よりもかけがえのない存在。

ふと、自己嫌悪に襲われた。

僕はいつたい今まで、彼女の為に何をしてあげただろうか。

いつもいつも、自分勝手な行動をしてきて、彼女にはいろいろ嫌な

思いをさせてしまつただろう。

最低だ。

そんな僕に何一つ文句を言わず、ずっとそばにいてくれた彼女。

そんな彼女をつきはなし、むびじい思いをさせてしまつた。

彼女に謝らなければ。

今度は僕が彼女の為にできる」とをしてあげたい。

「あなたにとつて私つてなんのかな・・・。」

彼女は涙を拭きながら震えた声でそうこつた。

僕は彼女に伝えなければいけないこと、言いたい事、話したいことがいっぱいあつたが、その彼女の涙が僕の心の奥を締め付けている気がして言葉にならなかつた。

そして気が付いたら彼女のこと力をいっぱい抱きしめていた。

「もつ、おわりこしよつか・・・」

彼女は僕の腕の中で優しい声でそつこつた。

彼女に言わせてしまつた言葉。

深く、そして重い言葉。

僕は彼女にかける言葉を必死に探した。

彼女の為に出来ることを必死に考えた。

彼女の為に僕が出来ること。。。

「・・・そつか、わかつた。」

そう言つのが精一杯だった。

人によつてはそれは間違つていると、反感を食つかもしれないが、
僕は彼女の性格を誰よりも理解していると自負している上で、彼女の
の幸せを願うならばと、別れを決意した。

僕と一緒にでは彼女は幸せになれない。

僕は彼女にはふさわしくない。

そう心の中で何回も繰り返し叫びつけた。

来年のクリスマスも一緒にこの海を・・といつ彼女との約束はかな
えることはできそうもない。

「・・・あ、雪・・・」

「・・・ほんとだ・・」

彼女の予言じおり、この日はホワイトクリスマスになった。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白さと、どこまでも続いている海が二人を包んでいるような気がした。

彼女の冷たくなった体と、彼女に対するありがとうという気持ちを抱きながら、いつまでもこの時間が続くことを祈り、彼女の温もりを感じていた。

僕は涙が止まらなかつた・・・。

第2部 1章 ホワイトクリスマス

(ちよ、ちよっとまでよー。)

雪の降る夜の街の一 角の交差点。

横断歩道をわたりきつた女性に、息をきらして走ってきた男性がそ
う呼び止めた。

赤信号が一人をささえげる。

その声に振り返る女性。

顔は見えない。

そこで古こビーテオのよひにノイズがはしるからだ。

なにやら道路をはさんで会話をしている。

ノイズがはいつて聞き取れない。

信号がなかなか変わらない。

去りうとする女性。

信号無視してわたる男性。

と、そのとき、猛スピードで突っ込んでくる車。

「だまするフレーキ音。

シンハとこう鈍い音とともに叫ぶ女性。

地面に倒れてる男性。

泣き叫ぶ女性。

そこでもいつも夢から覚める。

やハ、これは私が小さこときから何度も繰り返しあってきた夢だ。

毎回同じ夢を見る。

一体誰なんだらハ。

あのあとどうなるんだらハ。

多分これはまだみぬ未来の出来事だといつとは私にはわかつていた。

私の未来なのか？

一体いつの？

この夢を見た日は大抵悪いことが起きる。

昔からそうだった。

だけど、今日はクリスマスなのだから。

だって今日はクリスマスなのだから。

7回目のメールで音声が悲しく流れた。

「ただいま電話にでることができません。御用の方はメッセージを
どうぞ」

私は彼に向度電話しただろうか。

何度、メッセージを残しただろうか。

ここ2週間電話もメールも返事がない。

でも、悪いのは私だから。

あの話をすれば、彼は拒絶するのはわかつていた。

だけど、話さずにはいられなかった。

彼のために、そして私のためにも。

私は彼が好きだから。

異常気象により東京では40年ぶりのホワイトクリスマスになるで
しようと、テレビのお天氣お姉さんがガヤガヤ騒いでいた。

そんなの私にはあの日からわかつていた。

彼は、あの日交わした私との約束を覚えているのだろうか？

そうおもいながらも、私はすぐこじもとかけられるよう準備だけは
していた。

2章 待ち合わせ

「つたく、あいつはまた遅刻かよ・・・

彼が小声で独り言をいっているのを私は、彼が寄りかかってまつて
いる柱の後ろで聞いていた。

私は彼がすねた顔を見るのが好きだった。

その顔や、彼のリアクションを見るために、私は彼よりも必ず早く
来ていた。

そして、待ち合わせ場所からちょっと離れたところに彼が来るのを
待っているのだ。

私のために待ってくれている、そつおもひと、彼には悪いけど、う
れしくなるのだ。

「わっ

彼がタバコをふかしたのをみると、そろそろ待つてられる限界だな
と思い、彼の背中に抱きついた。

「じめ～ん。おませ～～

「びっくつせせんない。つたく、おい遅刻だぞ?」

彼はひょっと不機嫌そうにそう言った。

私は彼のすねた顔を見て、愛しくなった。

「「めんねえ、ほんと、」めん。おじひてるの?でも、ほら、女の子つてお化粧とか時間かかっちゃうからわあ」

「うん、そつかうだな・・って、だからって遅刻してもいいってわけじゃないだろ?だいたい遅刻したらなんてやーんだつけ?」

「はい、「めんなさい」・・もう、そんなにおいんないでよ~。ね?すきだよ~すきだ」

そういうて私は彼の腕をとり、背伸びをし15cmある身長差を縮め頬にキスをしてきた。

そうすると彼はすぐ機嫌がよくなる。

悪く言えば単純なんだよね。

そんな彼がかわいいんだけど。

「おこ、もう、やめひつて公衆の面前で、ばずかしいだろ~。そんなじや、「まかせれないぞ。」

そつは言ひながらも、彼は思つた通りつれしがつていた。

それを見て私はまた笑ってしまった。

好きといつ気持ちを実感できる瞬間でもあった。

そんな彼に何度も、すぐわれただろうか・・

私たちほどここでもいる「く普通のカップルだった。

たまにだけど私の買い物に愚痴をたれながらもつきあつてくれたし、
彼が好きなゲームセンターにいくと、私のためといいつつ、自分が
楽しみたいだけだろうけど、どうでもいいようなぬいぐるみをとつ
てくれたりもした。

私が見たいといった映画を観に街の映画館にいっては決まって、仲
良く2人でわけようといいながらポップコーンとコーラを一つずつ
買った。

結局はポップコーンは大半、彼の口の中にすいこまれるが、映画に
夢中になっている彼の横顔が好きだった。

映画を観終わると近くのカフェでお互いの感想を言い合い、たまに
お互いの解釈の違いから口論になつたりもした。

きりがないので、最後は私がビデオがでたらまた見ようね、といふ
ことで彼もしぶしぶ納得していた。

そしていつもと同じように彼の家にいき、心を重ねあつた。

私は彼のとなりにいれるだけでよかつた。

彼の胸の中で眠るのが好きだった。

この場所は誰にも渡したくないと思つた。

別れ際には背を向いている彼に腕をまわし、体をよせた。

彼の背中をみていると切なくなつてしまつからだ。

そんな私に彼は向き直つてやさしくキスをしてくれた。

私の気持ちには気付いていないだらうけど。

そのキスがとても好きだった。

彼のやわらかい気持ちが伝わつてくるキスだった。

「プレゼントも用意してあるし。」

ショッピングモールでの買い物に付き合ってくれた彼は疲れたのか、早く帰ろううと言つていたけど、私はあの海が見たくて嫌がる彼をつれて、私たちは海にきていた。

そんなとき、クリスマスの話題を話していくたら、彼の口から私の想定外の言葉が飛び出た。

「…………ほんと？…………うれしい…………。」

クリスマスプレゼント？彼が？

正直驚いた。

彼が私のために考へてくれている。

たとえ、つい流れで言つてしまつた言葉だとしても、私は素直にうれしかつた。

「ねえ！イブの日は、またここにこりよつよーこの海を見にねーねえ、いいでしょ？」

そういうながら私は彼の腕をとり抱きしめた。

するとなぜだか彼はちょっと顔が緩んだのがわかつた。

「別にいいけど、海が見たいなら他のきれいな所、連れてってやるよ」

「やだー！」の海がいこの。「の海が好きなの。つまへいえないけど、この海は・・・やっぱり、秘密！」

「なんだよ？気になるだろー？おしえよう

「ダメー、ないしょです」

やっぱり彼はしらないうじ。

私が彼を好きになつたのはこの海でだつた。

彼がはじめて連れてきてくれた海。

多分、彼は私があのとき流した涙の意味はわからなかつただろうけれど、彼なりに不器用ながらも私を元気付けてくれた。

そんな彼がなぜだか、かわいく見え、心が安らぐのを感じた。

そのときから、この海はとても大切な場所になつた。

それにしても初めてきた海つてことぐらい、覚えてないの？

しょ「うがないなあ。

彼が覚えていないのは少し不満だけど、私一人だけの甘い秘密みたいで、独り占めしてやるつと思つた。

「なんだよ～、ちえ、まいこや

彼は流したような返事をしたが、私にはそれはひょいとすねてつて、すぐにわかった。

それがかわいくて、私は左手で彼の右腕をぎゅっと握り締めた。

彼の左手は私が買った服をもつていたので、少し赤きじくそつな彼がちょっと驚しかった。

星を見るために座りやすい場所を探して歩いている彼の腕につかりながら、あのときのことと思い出していた。

恋に落ちた日のことを。

4章 恋に落ちた夜

その日、私は悲しみに包まれていた。

やはり今日は一日、家で独りでいればよかつた。

一人で思いつきり泣いていればよかつた。

昨日、飼っていたネコが死んだのだ。

寿命であることは死んだのだから、少しは救われるのだが、やはり悲しい。

しかも、私には前もってわかつていたことなのに。。。

涙は昨日でかれたと思つたのに、思い出すとまたあふれ出でてくる。

悲しみで心が押しつぶされそうになる。

やはり、バイトを休めばよかつた。

バイトじゃないではない。

バイトにいけば余計なことを考えずに入れると思つたが、やはりだめだつた。

休憩に入つたとたん気が緩んだのが、ためてた涙が一気にあふれてきた。

「ねえ、何で泣いているの？」

「バイトとして入ってきたばかりの彼だった。

私はその声がするまで、休憩室に人が入ってきたのに気づかなかつた。

いつも笑顔でいようと思い、無理をしてでも笑つてきた私が不覚にも泣き顔を人に見られてしまった。

しかし、涙をとめることはできなかつた。

そんな私を見てたぶん彼はビックリしたのだろう。

「・・・今日も暑いね・仕事はだり~し、こんな日は海にでもいつて泳ぎたいよね~」

彼が仕事以外のことを話しつけてきたのだ。

いつもは、あまり感情を表に出さない、愛想のない人だと思つていた彼がだ。

そのギャップに私は気持ちがあたたかくなつていいくのを覚えた。

「そうだね、海、いきたいよね、海・・・みたいなあ・・・

そういつた私の目にはもづ涙はなかつた。

不思議だつた。

なぜだかは自分でもわからなかつた。

「今日、何のあと時間ある?」

「え?」

いきなりの彼の誘いに戸惑つたが、そういうつた彼の顔はいままでバイトではみたことのない少年のような無垢な表情だつた。

不器用な彼の突然の言葉。

勢いで言つてしまつたのを後悔したのだろう、彼は少年のような表情から、たちまち慌てたような顔をし、どこか罰がかるそうな顔をしていた。

なんかそれがおかしくって、私もつい勢いで彼の誘いに乗つてしまつた。

バイトが終わると、彼は私を海に連れて行つてくれた。

その海は、人工の砂浜で、波も日に付く、お世辞にも綺麗な海とはいえなかつた。

けれど、その海が今の私にぴったりの場所のような気がして、心が穏やかになっていくのがわかつた。

彼は私と常に一定な距離を置いていた。

ちゅうと手を伸ばせば届く距離。

近づくとやつと離れていく彼。

変な空間。

不器用な彼。

ぎりげない態度。

戸惑っている表情。

その彼と私の微妙な距離感が、変におかしくて、私はいつもの笑顔ではなく、心から笑ってしまった。

ふっと空をみあげると、ト弦の月が私たちを見守ってくれていた。

5章 星に願いを

「まだかなあ、流れ星」

私はそういうながら彼の手をぎゅっと握り締めた。

たぶん彼はいやいやつきあつてくれてるんだろう。

それもそうだよね。

流れ星なんかいつ流れるかわからないのに、待ってるなんてつらいし、なにより待つことが嫌いな彼にとつては苦痛なだけかもしれない。

だけど、もう少しだから。

あとひょっとして流れ星が流れるから、がんばって。

今年は暖冬のせいもあるのか、昼間は夏の様な陽気だつたけど、夜になるとやはり冬だとこいつことを感じさせた。

海風の影響もあるだろうけど、冷たい風が冬だとこいつことを教えていた。

彼は今日出かける前に天気予報をみてきたのだひつ・薄着で寒そうだ。

確かに天気予報では今日またじけむ過いやすい暖かい日となるでしょうとこつっていた。

彼はそれを信じてしまったみたいだ。

なんかちょっとかわいく思えた。

寒そうに体を小さくしている彼に私はバックから魔法瓶をとりだし
コップにあたたかいココアを注いだ。

それを彼にわたすと黙つてココアを飲んだ。

暖かいものを用意してたなんて、不思議に思つかな？

まあ、このへりこじやバレないだろ？

私は唇間かつたマフラーを袋から取り出し、彼にそれをかけてあげ
た。

「ありがと」

それは小さな声だったけど、やせこわに満ち溢れてた声だった。

その恥ずかしそうな彼を見て私はキスをした。

そろそろ流れ星がながれる時間だ。

彼は私の突然のキスに驚いてか、私を見ている。

このままだと見逃しかねだらう。

でも教えてあげない。

いたずら心にむかひやがつた。

ほり、もうすぐ、もうすぐ。

「あー流れ星ー。」

漆黒の空を一筋の光が切り裂いた。

それはとても眩い光を放ち、右から左へとかけていった。

とても大きな、そして綺麗な流れ星だった。

私は星に願いをかけた。

『彼とずっと一緒にいられますよ』

ふっと、横の彼を見てみると、私の声に反応してか空をみあげキヨロキヨロしている。

「みたみた?」

私は彼が見逃したとわかつていていた。

だけどあえて聞いた。

見逃した理由が私の顔を見ていてだと知っていたから、ついついたずらっぽく聞いてしまった。

「私はしっかりみたもねえ。願い事もバツチリ！」

「何をお願いしたんだ？」

彼はちよつと悔しそうな声で私にきいてきた。

隠してゐるつもりだらうナビ。

「へへへ、ひ・み・つー」

やつこつと彼は不機嫌そうな態度で、「ふ～ん、じゃあ、さかね
よ。」といつてきた。

ふてくされてゐる。

たぶん私に甘えてきてほしいんだやつ。

だからわざとそーゆー強がりをみせてるんだ。

もう下手な演技。

ばれればれだつて。

しょつがないなあ。

そんな彼の態度がなんだかかわいくって私は彼の腕を強く抱きしめた。

ずっとこのままでいたい。

このまま時間が止まればいいのに。

これからもこの人と同じ時間を過ごしていきたい。

10年後も50年後も・・・。

素直にそう思った。

そのときだった。

目の前がまぶしい光に包まれたかとおもふと、私の身体は宙を浮いているようにフワフワし、急にその光にあたりの景色とともに吸い込まれたと思うと、真っ白い部屋に一人私は立っていた。

そしてぼんやりとあたりが見え始めた。

いつもとおなじよう。

ビデオテープを再生しているようにその映像は流れてくる。

赤と緑のイルミネーションで飾られてる街。

いつも私たちがまちあわせに使っている街頭だった。

そこに私が立っている。

今日買った新しいコートを着ている。

たぶん彼を待つていいのだね。

だけどその表情はどこかさびしげにみえた。

街頭テレビでは天気予報がやつていて今日はホワイトクリスマスになるといっている。

クリスマスに雪か。

私は久しぶりにたのしみな、期待感をもつ未来を見ることができた。

ちょっと私の表情がいつもと違つのが気になるけど・・・。

そう、私には未来がみえるのだ。

「なあ、どうした？おいつてば。」

彼の声で私は現実へと引き戻された。

「おー、どうした？ぼーとしちゃって

「ん・・なんでもない。海を見てただけだよ。」

「ふーん。ならいいけどさ。」

「あーあさつてさあ、雪、降らないかなあ。イブの日。イブの日に雪つてロマンチックだよね~、なんか絶対、雪降るような気がす

る～

「降らないって。天気予報では晴れだってってたぞ。それに東京ではホワイトクリスマスなんてまずありえないよ。あんなのドラマの中だけさ。たしか二〇〇〇年間で一回しかなかつたはずだよ。降つたら奇跡だって。」

「やうだとしても、降るよ、絶対ね。」

クリスマスに雪は降るのに。

あたつたらびっくりするかなあ、彼は。

私のみた未来はここまで一〇〇%そのとおりになってきた。

よこじとも、悪いことも。。

未来は変えることができないのだ。

「ねえ、今年のクリスマスだけでなく、この先も、来年も再来年もず～っと、ず～っとクリスマスは一緒にここに来ようね！約束ね！」

「え～、やだよ、めんどくせーなあ。だいたい先のことなんかわからんねーだろ？そんな先の約束したって意味無いよ。」

彼は「コアを一気に飲み干して空になつたコップを私に渡した。

それを受け取らうとした瞬間だった、また、あの感覚に襲われた。

また映像が私の頭のなかに流れ込んできた。

それは今までみてきた中で一番最悪な未来だった。

とても残酷な未来。

なぜ？

なんでなの？

わたしは心の中で何回もさう思んだ。

なんでこんな未来が・・・。

どうしてなの？

神様・・・残酷すぎるよ・・・。

「え、ちょ、なんだなっての？」

彼の『』惑つてる声がかすかに私の耳に入ってきた。

「おこ、どうした？どうしたんだよ？」

私は彼の問いかけに答えることができなかつた。

「・・・じめん、」

「なに、どうしたんだよ？」

「『めん、なんでもない、なんでもないの。』『めん、『めんね、』

そういうながら、私は彼を強く強く抱きしめた。

彼を放したくない。

その思いで頭がいっぱいだった。

涙が次から次へと流れ出し、彼の服を濡らしていた。

6章 未来

私には未来がわかる。

未来がみえてしまうのだ。

小さいときからやうだつた。

皆もあたりまえのように見えていたものだと思っていた。

それが私がわかつた。

私が特別だつた。

私は私が怖くなつた。

病氣だと本氣で思い、幼い私は未来が見えるたびに泣き叫んでいた。

どんなに普通といつのがつらやましかつただろひ。

人は未来がわかつたほうがつらやましいことおもつかもしれないが、
いじこなんかひとつも無い。

未来がわかるつことは、楽しいことが半減するといつこと。

悦びが減つちやうんだ。

驚きもないし。

そのくせ悲しい未来は、より悲しくなる。

悲しむ時間が長くなるのだ。

悲しみは前もってわかつていても悲しい。

薄れる」ではない。

そして、その悲しい未来を変えることもできない。

いままでどんなにチャレンジしてきたか。

悲しい未来を変えようと必死にもがいたが、結局はそのままのとおりになるのだ。

未来は変えられない。

変えることが出来ない。

ただ黙つてその時を待つしかないのだ。

どんなに悲しこうが待ち受けているとしても。

子供の頃、未来がわかる私は、小学校でちょっとした有名人だった。

見えたことを友達に話してしまったからだ。

それが全て的中してしまった、いじとも悪いことも。

そんな出来事から、私はいじめにあった。

悪いことが当たればおまえがやつたんだとか、おまえのせいだとか、言われだし、白い目でみられたりもした。

それからは決して人に自分の力を言わないと誓つた。

今まで、悲しみや、それを回避する術もない自分の不甲斐なさ、そして絶望に一人で耐えてきたことか。

祖父が死ぬのなんて5年もまえからわかつていた。

当時まだ元気だった祖父に、未来がわかつていた私はどう接しているのかわからなく苦悩した。

祖母のときは1週間前にわかつた。

1週間涙を流しつづけた。

なんて声をかけたらいいのかわからなかつた。

言つたところで、未来はかわらないのだから。

いつもいつも未来がみえるわけではなく、ランダムなのだ。

5年の未来だつたり、1ヶ月後の未来だつたり。

場所も、人も、時も、どんなことかもすべて突然私の頭の中に映像として飛び込んでくる。

あのときも私は未来をみた。

あの流れ星をみたあと、そう見てしまったのだ。

1日に2回未来をみたことなどいままでなかつた。

1回目はクリスマスが雪になるところ」と。

そして2回目は・・・。

確かにあれば彼だつた。

どんなにこれが見間違いならいとと思ったことか。

これほど自分の力をうらんだことはない。

これほど自分の無力さ、不甲斐なさを痛感したことない。

私は見てしまった。

一番みたくないものを。

彼の死を・・・。

そこは病院だつた。

いつもの様に、私の頭の中に突然入ってきた映像。

それは古いビデオテープを再生しているような感じで、所々ノイズが入っていたが、十分にわかる映像だった。

暗い感じの線香の匂いが立ち込める個室。

その個室の端っこのはうで声をだして泣いて座っている私がいた。

目は真っ赤になっていて腫れていた。

その私の視線の先には一つのベッドがある。

その上には誰かが横になっていた。

彼だった。

私は声にならない声をあげた。

なぜ？

なんでこんなものをみせるの？

私がなにかした？

なぜこじんなこと…。

今までで一番つらい未来。

心底この力をうらんだ。

神様を恨んだ。

どうして私だけが。

涙がとまらなかつた。

とめることが出来なかつた。

ただただ涙があふれてきた。

となりにいる彼が、いま、私のとなりに座っている彼が、死ぬ・・・。

たまらず私は彼を抱きしめてしまつた。

強く強く、離さないようのこと。

大好きな彼が死ぬ・・・。

残酷な未来。

さつき星に願いをかけたばかりなのに・・・。

なんでこんなことに・・・。

7章 溢れる想い

私はいつのまにか映画みたあとにきてくるカフュにいた。

たぶん彼が泣いている私をなだめながらソリまで連れてきたのだろう。

あまり覚えていない。

ずっとと考え事をしていたから。

彼がレモンティーとコーヒーをオーダーしたあとは、お互にしばら
くだまつたままだった。

「せつめいめんね、突然ないちゃつたりして。」

私はとりあず、突然泣き出してしまったことを彼に謝った。

「あ、ああ、・・なんだつたんだよ、・なんで突然なきだしたんだ
?なんか気に障つた?」

「「めんね、ちつきはちょっと感情が高ぶっちゃつて、・ほんと」「
めん、気にしないで。ね?」

「気になるよ。ちゃんとわけを言つてよ。」

「ちよつとね。なんでもないの。もう大丈夫だから。」

「なんだよ・・」

彼はどこかがつかりしたような声でいった。

彼に対して本当のことは言えない。

言ひつけどができない。

私は彼に真実を話すことはできなー。

どんなことがあっても。

「愛してる。」

私は、涙の本当のわけを言えない代わりに、心をこめてせりついた。

「え？ な、なんだよ、突然。」

「うん、別に。だた、言いたくって。愛してるよ。」

「わ、わかったよ。まったく。突然泣き出したりわけわかんねえ
なあ」

彼はどこか照れたような、安心したような安堵の表情を浮かべてい
た。

私は、彼が好きだ。

彼を愛している。

それを痛いほど感じた。

どんなことがあっても彼を守りたい。

彼を失うなんてこと絶対に嫌だ。

彼は死ぬ運命にある。

やつこつ未来にある。

私がみた未来はどんなにもがきあがいても決して変える事の出来ない未来。

それはわかっている。

わかつてゐるけど、どうにかして彼を救いたい。

どうすればいいのか？

ずっとそればかり考えていた。

助かる方法を。

あつと希望はあるはず。

未来はきっとかえることができるはず。

私が変えてみせる。

彼の未来を。

彼の運命を。

私にしか出来ないことだから。

私が彼を救う、 そう決意した。

そのために私ができること。

それは彼を変えること。

彼の考え方、 なにより命の大切さ、 生への執着心、 生きるとこひことをもう一度あらためて考えてもらう必要があると思つた。

彼は私とこるとときだけ、 どこか冷めた感じで世界を見ていた。

自分の人生なのこひこか投げやりで、 全てにおいてドライだ。

私が彼にことのことを正直に話して、 彼が死ぬ運命にあることをいつたら、 きっと彼は素直に受け止めてしまつだらう。

いや、 その時点での生きようとする意志を完全にこひしない、 すべくでも命を絶とうとするかもしけない。

あつと彼は生きるとこひことに未練は感じないだらう。

そんなんじゃダメだ。

生きて欲しい。

生きるところとは素晴らしいことだと、感じて欲しい。

彼に生を満喫して欲しい。

彼に考え方をあらためてほしい。

ちがう視点で世界みてほしい。

この世界には素晴らしいこと溢れていはすだから。

まだ彼はそれを知らないだけだから。

それを彼に教えたい。

そして、彼が死ぬと悲しむ人間がいるところをわかつてもらい
たい。

そのためにも、今まで以上に私は彼と向き合つことにした。

そう決意したのだ。

「ねえ、将来のこと、どうかんがえるの？」

「え？」

「あなたは、いつもどこか悲しい目をしている。なんで人を理解
しようとしないの？今はいいかもしないけど、この先そんなじ
やダメだよ。いろんな世界をしらなきや。そして、しつかり目標も
作って、その目標のためにしつかりと自分の足であるいていかなき

や。ね？」

そう私が言ったのはこないだの事についての話しが一区切りがつき、
彼がコーヒーをおかわりした後のことだった。

彼は突然の私の言葉に戸惑いを隠せないようだった。

その表情をみて私は失敗したと思った。もっと上手な聞き方があつただろ？

彼は窓の外を見ながら、私が去年あげたジッポでタバコに火をつけた。

「どうこう」とだよ。」

しばらくして彼がいった。

「なにがいいんだよ。なに？なんなんだ？お前は哀れんでるのか
？余計なお世話だ。」

その言葉には、怒りがこもっていた。

普段あまり感情を表に出さない彼がだ。

きっと彼の心の奥の傷を私が触つてしまつたんだろう。

「ち、ちがうよ、私はただ・・そうじゃなくて、あなたはいつも、
人と距離を置いてきたでしょ？言いたいことも言わないで・・だか
らせめて私には言ってほしいの、なにを考えて、何を思つているの

か、素直に言つてほしの。」

私はあわてて弁解した。

彼に私の気持ちをわかつてほしくて。

「お前に言われたくねーよ。だいたいおまえになにがわかるんだ?」

そっからはもう、彼は堰を切つたよつて言葉を感情とともにまくじたてた。

手がつけられなかつた。

彼に誤解をさせてしまつた。

気持ちをつまく言葉にできなかつた。

そして、運命の日を迎えた。

世間では東京が40年ぶりのホワイトクリスマスになるかもと騒いでいた。

8章 過去と未来をつなぐ現在

クリスマス、だといつこの海は人が少なく、どこかさびしそうだつた。

私たちはあの時、一緒に流れ星を探した場所と同じところに静かに腰をおろした。

どれほど時が経ったのだろうか、静けさがあたりを包みこんでいた。いろいろな考えが頭の中を駆け巡っていた。

「・・・久しぶりだね・・・、元気だつた?」

長い沈黙を破り、私は不安からか普段ならたわいもない言葉をかすれた声でいった。

「うん、まあまあかな・・・」

彼は相変わらず流したような返事をした。

それがかえつていつもと同じようで、私は少し安堵した。

「やつだーまたココア持ってきたんだ、一緒に飲もうよ・・・」

私はあのときと同じようにココアをつくってきた。

あの時、流れ星を探したときと同じよう。

なぜかあのときのことを思い出した。

彼の未来がみえる前のこと。

あの時までとても幸せだったのに。

あの時、星にかけた願いはかなわないの?

そう思つと涙が溢れ出しついた。

涙が止まらなかつた。

「なに泣いてるんだろね、私・・・」

彼が横田でみているのに気が付き、私は涙を拭きながら、かすれた声でそういった。

「あなたにとつて私つてなんなのかな・・・。」

彼に言いたいことはたくさんあつた。

だけど、それを言ひ勇気を私は持つていなかつた。

彼をくるしめるだけなんじゃないか。

彼にとつてわたしは重荷なだけなんじゃないか。

そういうネガティブな考えが浮かんでは消え浮かんでは消え、繰り返していた。

彼は、何も言わずに強く私を抱きしめた。

彼のぬくもりを感じながら、再度、この彼を死なすことだけはさせないと、強く思った。

そうだ、かんがえてみれば、あの未来の映像には私も写っていた。
彼が冷たく寝ている傍らに泣いている私がいた。

もし、わたしが今、彼と別れたらあそこには私はいないのではない
か？

そうすれば、私が見たあの未来は、これから起こる本当の未来とは
違くなる。

そうすれば、彼は死ななくても済むかもしれない。

未来が変わるかもしない。

確信はないけれど、その可能性は十分にある。

だとしたら、彼のために、彼の未来のために私は彼の前から姿を消
したほうがいいのではないか。

それが一番の方法なのではないか。

そう考えた。

そうだ。

それがいい。

それしかない。

愛する彼のために。

私が彼のために出来ること。

「もう、おわりにしようか・・・」

私は涙を田にいぱつに溜めてそういった。

やつと声にでた精一杯の言葉だった。

「・・・そりが、わかった。」

しばらくして彼が言った。

私を強く強く抱きながら。

私は背中に彼の大きな手を感じていた。

「・・あ、雪・・・」

「・・・ほんとだ・・」

やはり私がみた未来どおり、この口はホワイトクリスマスになつた。

未来は変わらない。

変えるためには、これでいいのだ。

私の選択は間違つていない・・・そういういきかせていた。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白をひとびともでも続いている海が二人を包んでいるような気がした。

私は涙が止まらなかつた・・・。

第3部 1章 僕の答え

「ね？ 雪になつたでしょ？」

どのくらいの時間がたつたのだろうか、僕はいつまでも彼女の温もりを腕の中で感じていたかったが、その願いも虚しく、彼女は僕の腕の中をすり抜けてそう言つた。

目を潤ませていたが、その表情はやさしい顔をしていた。

「うん。」

僕はそう返事をすることができなかつた。

「来年もいつしょにクリスマスをすくしたかったなあ」

僕はその言葉に心を殴られたように、鼓動が早くなつたのを感じた。

「『めんね、約束やぶっちゃって。』

彼女はいたずらっぽい笑顔でいった。

しかし、その表情がどこか切なそつで、悲しみに満ちているのがわかつた。

約束守れないのは僕のせいなの。

僕は、涙しかでなかつた。

「さよならは言わないよ。悲しくなるか。」

彼女の目にまた涙が溜まっていた。

「いまだりがとうね。たくさんいい思い出をありがと。」

最後まで何も言えない自分が情けなかった。

「じゃ。またね。」

彼女はそういうて、笑顔をみせていた。

しかしその笑顔はいつもと違つて、一筋の涙がほほをつたつていた。

そして、彼女は僕の前から去つていった。

人がまばらの砂浜を横切りながら、一度も振り返ることもなく・・・。

僕は彼女の後姿をただ眺めていた。

これが夢でありますようにと淡い期待をいだきながら。

そして、彼女の姿が僕の視界から完全に消えた。

僕は一人残されたこの人工の砂浜で降り続いている雪の冷たさを感じていた。

彼女が去つて、彼女を失つて、初めて彼女の大切さに気がついた。

いつのまにか僕の中でこんなにも彼女の存在が大きくなっていたなんて・・・。

彼女を失いたくない。

本気でそう思った。

気がついたら僕は走り出していた。

砂に足をとらねながらも、彼女の足跡を必死で追った。
もつ、いまさら遅いかもしけないけれど、僕の本当の気持ちを彼女に伝えたい。

その想いだけで僕の身体は動いていた。

僕は砂浜を抜け、ビーチのすぐ隣にある駐車場を駆け抜け、歩道に出た。

そこで彼女の姿を見つけた。

「ちょ、ちょっとよー！」

「おいー！まひつてー！」

僕は息をきりしながら、車道を挟んで向こう側に居る彼女を呼び止めた。

一人の間には赤信号が邪魔をしている。

彼女は僕の声に気づいたのか、驚いた顔でこっちを振り向いた。

僕は横断歩道の端で息を整えながら、想いを全てぶつけようと、話しだした。

「『』めん！」

僕は道路の向こう側にいる彼女にしつかり聞こえるよう大きな声で言った。

「いまさらかもしれないけど、僕は、僕は、きみが好きだ！僕にとって君は大切な人だつて気付いたんだ。君といふ今まで経験したことない気持ちになれた。はじめて人を真剣に好きになれたんだ。はじめて、心から言えるよ、愛してるって。君を愛してる！」

僕は思ひまま口にした。

考えるよりも先に言葉がでてきた。

それはかつによくはないと思つけど、僕の本当の気持ちだった。

彼女は泣いていた。

僕はただ泣いているだけの彼女を抱きしめたいと、はやる気持ちを抑えられず、彼女の元にかけだそうとした。

「こないでええ！」

そう彼女は叫んだ。

泣きながら。

「ここにないでえ！」

そう叫ぶ彼女の言葉を無視し、僕は彼女を抱きしめるべく駆け出した。

そのときだった。

僕の体はまぶしい光で包まれた、と、同時にクラクションが鳴り響いた。

驚いて僕は足が止まった。

車が僕に向かって突っ込んでいた。

あたりには車のブレーキ音が響いた。

つぎの瞬間、僕はドンと押され地面に倒れた。

しかし、車に惹かれたにしては痛くない。

僕は、あたりをゆっくりと見回した。

車のブレーキ跡、アスファルトとタイヤが焼ける臭い、斜めに停まっている車、その車のライトが照らす白い雪、

そして、倒れている彼女。。。

そうだ、ぶつかると思った刹那、彼女は僕を突き飛ばしたのだ。

そして僕は助かり、彼女は、僕の身代わりにーー！

そんな！

なんてことだ！

なんてことになってしまったんだ！

僕はすぐに倒れている彼女に駆け寄った。

「おい！おい！！大丈夫か？おい！なんで・・なんでだよ・・おい！返事しろって！誰か！！誰か救急車！！救急車呼んでください！」

僕は彼女を抱え起こし体をゆすった。

さつきまで涙の通り道だった頬は、今は赤く染まっている。

何で僕のために・・・。

何で僕なんかを助けたんだ・・・。

なんで・・・。

僕は泣いていた。

僕の涙が、彼女の頬を伝ってアスファルトにおちていく。

「なんでだよ、僕を、なんで助けたんだよ、なんで、」
「」

彼女は、ゆっくりと目を開けた。

「おい、きこえるか？すぐに救急車がくるからな？大丈夫、たいしたことないから、な？」

彼女はうつろな目線の先に僕を捕らえると、二つ巴と微笑んだ。

「よ、よかったです。あなたは無事なのね？」

彼女の声は弱弱しかった。

「あ、ああ、僕はなんともない。君のおかげだ。」

その彼女の声を聞いて、僕は涙声でさういった。

「なんで、なんで僕を助けたんだよ。なんで・・・ぼくなんかを。」

「・・・な・・なにいつてんのよ・・・あたりまえじゃない・・・そ
んなの・・・だつて・・
あなたを・・愛してるんだもの・・・」

そういうて彼女は弱弱しい小さな手を震わせながら、僕の頬を流れ
る涙をやさしく、いや、力なくぬぐつた。

そして僕に笑顔を見せたかと思った次の瞬間、彼女はゆっくりと瞳
を閉じた。

それと同時に小さな手も僕から離れていった。

「え・・うそだろ? やめろよ、へんな冗談は・・・。おいつてば、
目、あけろよ、おい!
わらえねえって、、目あけろよ、おこ!・・・そんな・・だれか
!・だれかあ!・!・!

。 真っ白な雪が降り注ぐ聖なる夜に、僕の声がかなしく響いていた・・

2章 私の答え

「ね？ 雪になつたでしょ？」

どのくらいの時間がたつたのだろうか、

私はいつまでも彼の腕のなかにいたかったが、意を決して彼の腕の中から離れ、そう言つた。

「・・・うん。」

そういつた彼の目には光るもののが溢れていた。

泣いている。

顔をぐりりぐりりにして。

それをみて私はまた抱きしめたくなつた。

だけどダメ。

そういういきかせて、自分を押し殺すように冗談まじりに笑ふるよ
うに言葉を続けた。

「来年もいつしょにクリスマスをすゞしたかったなあ

精一杯のやせがまん。

涙を必死にこらえた。

泣かなこよつに楽しこことを奢るよつとした。

だけど、浮かんでくるのは彼との思に出ばかり。

「いのんね、約束やぶつかやつ。」

私は笑顔でいよつとしたが、涙が耐え切れず、またながれだした。

彼も泣いていた。

ダメだ、これ以上彼の顔をみれない、みたら決意が揺るぎやうだ。

「わよなは言わなこよ。悲しくなるかい。」

わよなは言いたくなかった。

いつたうむつ、本当に一生あえなくなる、わい思つたから。

「こままでりがとうね。たくさんのに思に出をあいがとひ。」

自分でも声が震えているのはわかつた。

でも、しつかりいわなくちや。

「じゃ。またね。」

私はそつこつて、彼から離れ、歩き出した。

涙が次から次へと溢れ出した。

つらい。

本当につらい。

彼のこと好きなのに。

本当は今からでも引き返して彼に抱きつきたい。

あいしてるとて言いたい。

だけど、それはできない。

彼の為に、彼の未来のために。

私の一番の幸せは、彼が幸せに生きていことだから。

そう思って、振り返らないようにした。

これでいいんだ。

これで彼の未来は変わる。

彼は死ななくてすむ。

白く降り続く雪は、まるで私を慰めてくれてるみたいと思えた。

「ちよ、ちよっとまってよー。」

やばい、彼の声が聞こえるよ、幻聴だよ、やっぱ、私はそんなにも
彼が好きなんだ。

「おーーーまでってーーー」

?

幻聴じゃない。

今度ははつきりと聞こえた。

彼の声だ。

私はびックリして後ろを振り返った。

私はいつのまにか横断歩道を渡っていて、その車道の向い側に、
彼がいた。

彼が私を追いかけてきてくれた。

「『めんーーー』

彼は大きな声でそう言った。

謝ってきた。

なんであやまるの？

私は、もう一度彼の姿を見ることが出来るなんて思ってなかつたし、ましてや追いかけてくれるなんて思いもしなかつたから、すつごい驚いたし、すつごいうれしかつた。

私の涙は悲しみの涙から、嬉し涙に変わつた。

「いまさらかもしれないけど、僕は、僕は、きみが好きだ！僕にとつて君は大切な人だつて気付いたんだ。君といるといまで経験したことない気持ちになれた。はじめて人を真剣に好きになれたんだ。はじめて、心から言えるよ、愛してるって。君を愛してる！」

うれしい。

そんな風に思つてくれてるなんて。

すつじくうれしい。

私は、彼を想う気持ちをもう抑えることが出来なかつた。

今すぐ彼に抱きつきたい。

そうおもつた。

しかしその刹那、また突然、頭に映像が飛び込んできた。

未来だ。

でも、この映像は・・そう、何回も見たことがある。

そうだ、夢でみるあの場面だ！

あのこつもの夢だ！

なんで！？

いや、今回ば、顔が見える、、いつもまやけてみえなかつたの！」。

あれは・・・！

私だ！！

私が立つていい！

そして、、向こう側にいる男性は・・彼だ！

彼がいる…！

あの、夢にでてくる男女は、私たちだったのだ！

私はすべて理解できた。

あの夢は私たちの未来だった！

とこつことば、、彼の死は・・事故だったんだ・・それも、、今一・

今この場面だ…」のすぐあと…！

なんということだ！

彼と別れても、結局そのとおりの未来になつてたなんて！

彼は、私にかけよるべく、走り出そうとしていた。

ダメ！！！

「いいでええ！」

こつちに来てはいけない！！

そのとおり、猛スピードで二つちに突っ込んでくる車が見えた。

このままでは私が見た未来どおりになつてしまつ！

彼は死んでしまう！！

「...」
...」

必死にそこへ叫んだ

彼は私の制止を聞かず、赤信号を駆け出した。

もうダメ！！

彼の体は車のヘッドライトに包まれていった。

彼の足がとまつた。

轢かれる！

彼が死んじゃう！！

い、嫌あああ！！！！

・・・

・・・

遠くで彼の声が聞こえた。

顔に水滴が当たった気がした。

目をあけると、そこには彼がいた。

泣いている彼が。

「おい、きこえるか？すぐに救急車がくるからな？大丈夫、たいしたことないから、な？」

そうじつている彼の声は小さく聞き取りにくかった。

なんでわたしは寝てるのかな？

そうだ、私は、あの瞬間、体が自然に動いて・・・

彼をたすけようと必死で・・・

そつか、そだ、彼をつきとばしたんだ。

無我夢中でんまりおぼえてないや・・・

頭もボーッとしてるし・・・。

でも、よかつたあ・・・彼・・・助かつたみたい・・・

「よ、よかつたあ。あなたは無事なのね？」

なんか言葉がうまくでなかつたけど、彼が生きているのがうれしかった。

「あ、ああ、僕はなんともない。君のおかげだ。」

「なんで、なんで僕を助けたんだよ。なんで・・・ぼくなんかを。」

そうじつた彼は子供みたいに泣いていた。

「・・な・・なにいつてんのよ・・・あたりまえじやない・・・そ
んなの・・・だつて・・・
愛してるんだもの・・・」

本当によかつた・・・。

彼は死なずにすんだんだ・・・。

私は・・・彼を守れたんだ・・・。

私は・・・彼の・・・未来を変えたんだ・・・。

大好きな彼を・・・私は・・・。

私は安堵からか、急に眠くなってしまった・・・。

体に力がはいらなくなるのを感じた・・・。

もう、何も見えない・・・

何も聞こえない・・・

わかるのは・・私を抱いている、彼の温もりだけ・・・。

僕は過去への旅を終え、再び現在に戻ってきた。

いや、彼女が僕にくれた【未来】に。

気が付けば周りにいた何組かのカップルは、今はすっかりいなく、辺りは静寂に包まれ、海岸に押し寄せる波の音しか聞こえなくなっていた。

僕は冬の寒い風を浴びながら、ただ広い浜辺に腰を落とした。

真つ黒な天球に星を探しながら見つめていると、不思議と自分もその闇の中の一部になつたような気がした。

それは決して、恐れとかではなく、むしろ安心感に包まれていくような感じだった。

僕はその無限に広がる闇の中に落ちて、あの時、彼女が星にかけた願いがなんだつたのか、わかつたような気がした。涙が自然と溢れ出した。

星たちは突然、フィルターをかけたようにぼんやりと輝いていた。

空が滲んで見え、よくわからなかつたが、しかし確かに僕はこのときとても長い尾を引いた流れ星を見た。

僕はその流れ星に願いをかけた。

あのときかけられなかつた願いを・・。

空に瞬く星達が尾を引いて一斉に流れ出した。

夜空を切つて走る星達はあまりに鋭く、まるで夢の世界に迷い込んだように美しかつた。

僕はビニからか砂浜を歩く音に気が付き、人が近づいてくる気配を感じた。

その足音は僕の真後ろでとまつた。

「わっ」

突然、うしろから少し小さな手が僕の身体を包んだ。

「やっぱりだつたね。」

それは彼女だつた。

あのじるじと変わらない笑顔を僕に見せてくれた。

「もっ、なにしてるのー？」

僕は彼女の手をとりぬくもりを感じた。

「わへ、じんなつめたくなっちゃてえ、しょうがなになあ

彼女はそういうと、バックから魔法瓶を取り出し、あつたかい口アを僕に注いでくれた。

それを受け取つて僕はゆっくりと口元口じた。

優しい気持ちになつていった。

「『じめんな、僕がわるかった。』

「あはは、もうこいつて。私もわるかったし、ね、もう仲直りね。」

そうこいつて彼女は僕にやさしくキスをした

。そのキスは僕に『おうきを』『えぐわてくれた。

今度は僕から彼女にキスをした。

長くやさしくキスを。

「それにしてもさあ、普通、家をとびだすかなあ？びっくりしちゃつたよ、もう。」

「いやあ、『じめん、なんかつい。』『じめんな。』

「いいけどね。『じめんせこ』にきてるんだうつて思つたから。」

「そつか。」

「ち、早く帰つてケーキだべよ~もひ、おなかすこちやつたよ~

「夕飯むやんと食つてたじやんか。」

「えへへ、ケーキは別バラなの~」

「ふ~ん、まあ、いいけどわあ、・・・あのせ、ひとつ聞いていい?」

「なあに?」

「あのせ、前から聞きたかつたんだけど、なんでいついつもココア持つてんの?魔法瓶つて・・普通もちあるかねーだろ?」

「うそ?~セウ?~モウ?~こいじやない、そんなこと~。はやくかえろ~」

そうこつて笑顔で彼女は僕の腕をつかんだ。

僕は彼女にせかされ、この海をあとにした。

彼女の温もりを腕に、そして肌には海風を感じながら・・・

終わり。。。

最終章 ハラ（後書き）

へタですいません。これが処女作です。表現力がまるでないですが。
読んでくださった方、なんでもいいんでコメントください。わおねが
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336c/>

雪月花

2010年10月20日18時49分発行